白老仙台藩陣屋跡 史跡指定50周年記念事業

仙台藩士の故郷を学ぶ研修・交流事業実施報告書

仙台藩白老元陣屋資料館友の会

◇本事業は、「白老町みんなの基金」の補助をうけて実施しました◇

◇行　程　表◇

平成 28 年 8 月 25 日（木）

8 時 30 分	白老コミセン集合　教育長表敬訪問
9 時 00 分	白老発～10 時 00 分　新千歳空港着
11 時 10 分	新千歳空港発～12:20 分仙台空港着
12 時 30 分	昼食（仙台空港内）
13 時 30 分	仙台空港発
14 時 20 分	副市長表敬（14 時 30 分～30 分）*
15 時 00 分	仙台市役所発
15 時 10 分	仙台駅（土産購入）
16 時 30 分	愛宕神社参拝
18 時 00 分	愛宕神社発
18 時 30 分	宿泊施設着（仙台市内）

平成 28 年 8 月 26 日（金）

10 時 20 分	石巻市「慶長使節船ミュージアム」着
11 時 10 分	同発
12 時 00 分	「震災伝承スペースつなぐ館」着
14 時 30 分	石巻市発
15 時 30 分	松島町着　「瑞巌寺」見学
17 時 00 分	松島町発
17 時 30 分	宿泊施設着（塩釜市内）

平成 28 年 8 月 27 日（土）

9 時 00 分	塩釜神社着（昇殿参拝～資料館見学）
10 時 30 分	塩釜市発
11 時 30 分	仙台市着　～昼食
12 時 30 分	仙台市博物館着
13 時 50 分	同発
14 時 00 分	瑞鳳殿等見学
14 時 45 分	同発
15 時 30 分	仙台空港着
16 時 20 分	仙台空港発～17 時 35 分新千歳空港着
18 時 30 分	白老着（解散）

◇仙台地方研修報告～慶長遣欧使節船ミュージアム～◇

訪問日：平成 28 年 8 月 26 日
報告者：武田信昭

天候は快晴、盛夏の東北の太陽の下、昨晩の疲れも見せず、午前 8 時 30 分にホテルを出発し、石巻市にある『慶長遣欧使節船ミュージアム サン・ファン館』に 10 時に着いた。

『サン・ファン館』は、サン・ファン広場・慶長使節展示室と展望棟・ドック棟から構成されている。サン・ファン広場は、支倉常長らが見たイタリア広場をイメージし、ステージを中心にタイルが放射線状に広がり、周囲の緑が美しく調和していた。また、展望棟上部から見渡せる復元船と大海原は、石巻の自然と歴史を併せて感じられる絶景のスポットである。

慶長使節展示室には、支倉常長と慶長使節が派遣された時代と、使節が辿った足跡をパネルやジオラマなどを使って解りやすく紹介している。また、ドック棟には国内で復元された最大のガレオン船であるサン・ファン・パウティスタが係留展示されていた。

復元の帆船を眺める（現在船内の立ち入りは不可）

＜政宗の発送と行動力＞

今から約 400 年前の 1613（慶長 18）年 9 月、仙台藩主伊達政宗の命により使節団 180 人を乗せた木造帆船は、牡鹿半島の入江からヨーロッパへと出航した。日本ではじめて太平洋を渡った外交使節。その目的は「メキシコとの通商貿易締結」と「キリスト教布教のための宣教師派遣に要請」であった。

交渉を任されたのは、政宗の腹心である支倉常長。彼をはじめとする使節一行は、7 年という長い歳月をかけて現在のメキシコ、キューバ、スペイン、イタリアなどの南米およびヨーロッパ諸国を歴訪。通信機のない時代に、遠く離れた異国の地でひたすら交渉を続けた常長の胸中には、いったいどんな思いが去来していたのだろうか…。

スペインに残る古文書には、常長が現地の修道院で国王隣席のもとカトリックの洗礼を受けたことが記されている。この行動が意味するものは純粋な信仰心か、それとも難しい交渉をスムーズに進めるための戦略か、その答えは、いまだ諸説紛々とし推測の域を出て

いない。

一方、常長が日本を不在にしている間、幕府はキリシタン弾圧と鎖国政策に大きく舵を切っていた。頼みの政宗も幕府の圧政に従わざるを得ない立場に追いやられていく。こうした日本の国内情勢が海を越え、異国の交渉相手にも伝わりはじめると常長にはもうなす術がなかった。

結果的には、何一つ交渉の成果を見いだせないまま 1920（元和 6）年 8 月、一行は 7 年振りに日本へ帰国。徳川幕府による禁教体制がますます強化される中で、常長はそれから 1 年後、失意のまま…この世を去った。

慶長使節に関して、同時代の記録はほとんど残っていないため、慶長使節の歴史は闇の中に閉じ込められてしまったのである。

＜明治時代～使節団との不思議な縁＞

太平洋や大西洋を横断した足跡を学ぶ

こうして長年、歴史の表舞台に上がることが無かった慶長使節が再び日光を浴びるようになったのは、派遣から 250 年以上が経過し、鎖国が終わった 1873（明治 6）年のことであった。5 月、岩倉具視率いる遣欧使節団がイタリアはヴェネチアを訪れた際、支倉常長の書状を発見した。そのことが、慶長使節再評価のきっかけとなった。

仙台藩から宮城県へ移管されていた資料は 1873（明治 9）年に行われた仙台の博覧会にて展示され、東北を巡幸していた明治天皇の天覧を受けた。その後、展示された資料は東京に送られて調査を受け、「伊達政宗欧南遣使考」が同 12 月に出版された。

このように、明治期の特徴としては、政府を中心に慶長使節に関する研究や調査が行われたという点が挙げられる。

＜大正・昭和時代～県内の各地域で巻き起こった慶長使節ブーム～＞

それまでは政府主体だった慶長使節への盛り上がりは、時を重ね関連地域へと広がっていった。仙台北山にある光明寺では、1920（大正 9）年に支倉常長帰朝 300 年祭が盛大に行われたほか、出帆の地と伝わる牡鹿郡荻浜村月浦（現石巻市月浦）に「欧南使士支倉六衛門常長解纜地」記念碑が設置されるなど、県内の関連地域にも広がった。

それに伴い、わずかな記録に基づいた出帆や建造の地に関する論争も活発になっていく。

石巻では 1929（昭和 4）年に当時の中日イタリア大使アロイージ男爵の月浦訪問が決まり、それをきっかけに慶長施設への関心が急速に高まった。さらにこの時期、「石巻 3 奇人」のひとりにも数えられる小西久兵衛という薬商人が、在野の立場から慶長使節の歴史研究

に携わっていた。小西は前述の記念碑の設立のほか、「月浦余影」という著書を出版し、出帆・建造の地への論争などについてまとめている。戦後の 1963（昭和 36）年には、出帆の地月浦で慶長使節出帆 350 年を祝うお祭りが行われ、石巻市内全域がお祝いムードに包まれた。

このように、慶長使節は地域の誇りとして人々に愛される存在となっていった。

＜慶長遣欧使節は、震災の復興事業？＞

1611（慶長 16）年、三陸沖で大きな地震が発生した。地震の規模は、ほぼ東日本大震災と同等レベルで、とくに沿岸地域の津波被害が甚大だったところも似ている。現在の状況と置き換えると、政宗は地域の復興に全力で取り組んだことが推測される。常長らを乗せた使節船がヨーロッパへ出帆するのは、慶長の大地震から 2 年後のこと。つまり、このプロジェクトこそが政宗による復興事業の一環だったのでは、という見方が東日本大震災以後、有力になっているようだ。

震災で打ちひしがれた人々の心に希望と勇気を与えようと、当時最先端の造船技術を利用してヨーロッパ外交を目指したのだろうか。政宗は、慶長遣欧使節を復興のシンボルにして、新たな未来を描いていたのかも知れない。

＜帆船の雄姿は永遠に＞

開催中だった帆船の木造模型展

さきの東日本大震災によって、サン・ファン館自体は被災したものの、復元船サン・ファン・パウティスタだけは押し寄せる津波にも耐え抜いたそうだ。かつて太平洋の長旅を支えた洋式木造帆船。その優れた耐久性は何の因果だろうか、400 年後に再び起きた震災によって立証されることになった。今も誇らしげに太平洋の海原を見渡す孤高の帆船サン・ファン・パウティスタ。威風堂々としたその佇まいは、かつて命懸けで海を渡った、常長をはじめとする男たちの雄姿と重なる。

＜終わりに＞

2016（平成 28）年 8 月 10 日に、慶長遣欧使節船ミュージアムは開館・開園 20 周年を迎えた。20 年の歳月の中で、東日本大震災による甚大な被害と休館を経て、再開館を果たしたことになる。

江戸時代初期に仙台藩で作られたガレオン船であるサン・ファン・パウティスタと、当時未知の世界であった海外に旅立ち堂々と振る舞った慶長使節は、どの時代も人々に海外

へ目を向けさせ、前に進む力を与えてきた。また、慶長使節の歴史は、その勇壮さと悲劇性から文化面でもモチーフとして多く取り上げられた。小説や絵画、歌劇に加えて最近ではキャラクターという形でも、多くの人々に存在が広まっている。ほかにも、慶長使節関連資料が 2013（平成 25）年にユネスコの世界記録遺産に認定され、世界各国で慶長使節 400 年を祝う事業が行われるなど、現在のその価値はまさに世界的なものとなっている。

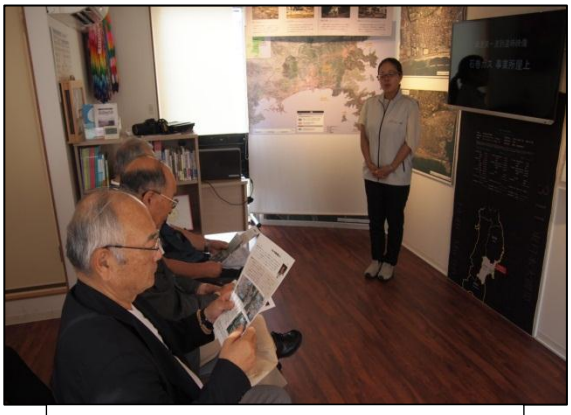
使節の交渉は、史実では失敗に終わった。しかし 400 年後の今、このように多くの国々や人々を結びつけ、勇気づける役割を果たしている。海外に目を向ける先進性や大震災などの困難にくじけない強い心、これらの精神が時代ごとに何度も蘇り、400 年間継承されてきた。これが慶長使節と木造帆船サン・ファン・パウティスタ号のもつ根本的な価値なのである。

「百聞は一見に如かず」といわれるが、今回のサン・ファン館来訪を通して、人々に「前に進む勇気や希望を未来へ伝える」貴重な施設だと感じた。

◇仙台藩士の故郷を学ぶ研修会に参加して◇

訪問日：平成 28 年 8 月 26 日
報告者：高橋淳一

東日本大震災の発生から 5 年半が過ぎた。被災地域の中でも 3,500 人を超える死者、行方不明という壊滅的な被害にあったのが、かつて仙台藩の海の玄関口として栄えた港町石巻市である。



震災時の津波の記録映像を視聴

その石巻市にある公益社団法人「みらいサポート石巻」を訪問した。

「みらいサポート石巻」はコミュニティの活性化、町づくり、情報発信という、それぞれの側面から地域づくりをサポートしている。地域に密着し、震災伝承関連団体、街なか創生協議会、観光協会などの団体を支え、復興に向けて取り組む応援隊なのである。

震災の記憶を教訓として活かすプログラムのひとつが、津波映像の視聴から始まり、実体験を話す語り部の講話である。当日の語り部は、震災当時、湊第 2 小学校教頭であった佐藤茂久氏である。

生徒は泣きながらもパニックにならず、いったんは整然と校庭に避難したが、大津波警報を聞いた佐藤氏は校舎 3 階に逃げることを即座に決断した。津波は 3 階ギリギリまで押し寄せた。その後 3 階は最大 700 名の避難所となり、教職員はその対応と子ども達の安否の確認など多忙を極めたという。水の不足で 1 日あたりカップ 1 ㎝位しか与えられず、私共もその場で体験したのであるが、舌の潤う程度であった。迫りくる大津波、生と死とのはざまで人は何を考えどう行動したのか、語り部は、自らの体験と教訓を語り継ぐことで、明日の命を救うことに繋がることを信じているのだ。

コップの線ぐらいの水量が一日の配当だった

その後、佐藤氏に導かれるかたちで「語り部との街あるき」を行った。石巻の街を歩きながら津波による被害状況や震災直後と現状の様子を見比べることができる試みである。石巻市の「過去・現状・未来」を伝えるために、タブレット端末向けアプリを活用した「防災まちあるき」であった。

さらに震災展示スペース「つなぐ館」の見学を行った。震災の記憶を後世へと繋ぎ、震災の実態と人々の取り組みを多面的な視点から捉え、安心・安全な街づくりを市民と共に考える役割が期待された情報ステーションであった。来訪者に被災の記録や教訓を伝え、歴史や被災前の町並みを振り返る場ともなっていた。部屋の中央には石巻専修大学の学生が制作した被災前の立体模型を配置し、壁面には被害の概要を伝えるパネルが印象的であった。

タブレット端末を駆使し、冠水の高さを知る

石巻では避難の際の問題点のひとつに情報伝達の錯綜があり、2 重災害に繋がりかねない状況もあったという。伝統的に伝わる知恵に、最新の科学的な知識を併せ持ち、地域の事情に沿った対策が必要であることを痛感した。しかし、各種の防災計画やマニュアル系の整備だけでなく、「自助」の取り組みとして家庭での食糧・飲料水の備蓄など、基礎的な備えが防災を日常的に考えるきっかけとなり、風化させないことに繋がる一番大切なことに間違いはない。

仮面ライダーの原作者で知られる漫画家石ノ森章太郎の出身地である石巻市は漫画の国をスローガンに掲げ、漫画による町興しを行っている。旧北上川の中州に建つ石ノ森漫画館も高さ 5mの津波により大破したが、今では改修されており何事もなかったような風情を醸し出していた。

語り部の着用するベストの背中には「公益社団法人」「伝えつなぐ 3.11」「みらいサポート石巻」と書かれていた。

残暑の厳しいなか、私共に貴重なプログラムを教示して下さったスタッフの皆さまにお礼を申し上げます。

最後に、今回の「仙台藩士の故郷を学ぶ研修会」にあたり、ご支援・ご指導していただきました関係の皆さまに感謝申し上げます。

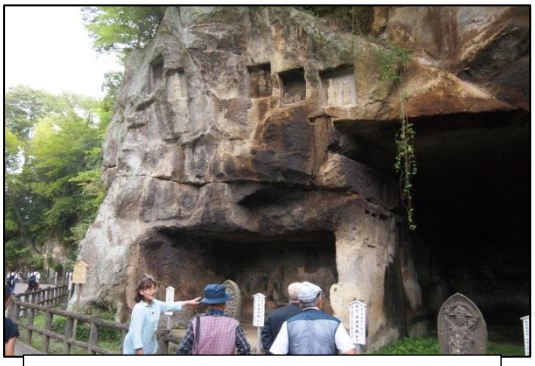
◇松島町瑞巌寺を訪ねて◇

訪問日：平成 28 年 8 月 26 日
報告者：川西 政幸

瑞巌寺は天長 5（828）年、比叡山延暦寺第三代座主であった慈覚大師円仁による開創である。当時は延暦寺に比肩すべきと意図され、延福寺と命名された。鎌倉期に及んで天台宗延福寺の歴史は一度幕を閉じたが、その後は法身禅師を開山の祖とする臨済宗の禅寺となった。詳しい年代は解っていない。

時代は移り、藩祖伊達政宗公は慶長 9（1604）年、関西から呼びよせた名工 130 人以上を投入した堂宇造営に着手。5 年の歳月をかけ、慶長 14（1609）年に落成した。国宝の本堂や庫裏、国指定重要文化財の御成門や中門など貴重な建造物が現在に残る。御成玄関や太鼓塀など指定文化財以外も素晴らしく、桃山時代の様式美を施した建造物群である。

我々友の会員一行は 8 月 25 日（木）に、7 年ぶりとなる仙台入りを果たした。台風の接近を控えていたが、概ね快適な行程であった。


岩壁を掘りぬいた修行場の跡

仙台藩白老元陣屋資料館友の会では、幕末蝦夷地の遺構である仙台藩の陣屋跡をより多くの方に知ってもらうべく、昭和 59 年の結成以降、絶えることなく資料館の解説活動を続けてきた。また、我々自身も知識・見聞を広げるべく、年に 1 回の町外研修を実施している。今回は「白老町みんなの基金」の助成を得て、仙台藩士たちに縁の土地を巡る機会に恵まれた。史跡白老仙台藩陣屋跡が昭和 41 年に国の指定を受けて 50 周年目となる節目に相応しい、貴重な経験をすることができた。

さて、初日は仙台市内で過ごした一行だが、翌日には進路を北に取り、仙台藩の要港であった石巻市へ向かった。過去に何回か行った宮城県内の研修でも立ち寄っていない地域である。町並みを眺めつつ、『慶長遣欧使節船ミュージアム』を訪問。午後には東日本大震災の記憶を語り継ぐ「震災伝承スペースつなぐ館」などを訪問し、16 時 20 分頃松島町に到着した。

時雨模様となった夕暮時、待ち構えていた松島観光ガイドさんに案内を依頼した。依然として改修工事の最中であったため全ての見学は適わなかったが、1 時間ほどの滞在時間は有意義に使うことができた。

最初に案内された洞窟遺跡群は 1200 年前のもので、修行と生活のために掘られたとのこと。花崗岩質とはいえ、相当の労力を要したものと推測される。付近には昔湾内で沢山鰻

がとれたので供養のため建立された鰻塚や、鉄道殉職者慰霊碑なども設けられていた。

参道は依然として改修中で、迂回するように中門へ至る。威容を誇った杉並木は、東日本大震災で波を被り、その多くを伐採しなければならなくなったとのこと。誠に残念である。ただ、中門直前で波が留まり、本堂まで津波被害が及ばなかったのは幸いと思うべきだろう。

さて、本堂は 1609 年に完成した国宝で、70 歳で死去された政宗公および 2 代忠宗公の位牌がまつられている。お墓は仙台市内の経ヶ峰中の瑞鳳殿にあるが、菩提寺として崇拝されていた。堂内に入ると、正面には「室中孔雀の間」が広がり、隔てた奥の仏間に政宗公の位牌を確認した。本堂はぐるりと廻廊で囲まれており、時計回りに文王の間や上段の間、上々段の間を順番に案内していただいた。政宗公の住居である上段の間、襖には目出度い紅白ツバキが豪華に描かれていた。襖の一枚はどんでん返しになっており、傍仕えの武士が有事に備えて控えていたとのこと。現在にも通じる様式美のなかに、時勢を反映した機能美に触れられた気がした。この上段の間の隣は一段高い上々段の間となっており、天皇陛下が巡幸されたときのための部屋にあたる。明治天皇が最初におやすみなられたそうだ。

政宗公の位牌が安置された国宝の本堂

この本堂は外観こそお寺の様相だが、内観は城造りとなっている点が特徴である。廻廊に囲まれた本殿は一巡りで 360 坪に至り、10 を数える各部屋は意匠を凝らした煌びやかな襖によって仕切られていた。この襖を取り外すことで一つの大広間としても機能する造りが、お城造りの特徴である。17 時 15 分の閉館まで拝観すべく、最後に宝物館である清龍殿を見学。

瑞巌寺の改修工事は平成 30 年度まで続けられる見通し。いずれまた感無量の気持ちで松島町を後にした。

参道は整備工事中

ガイドに案内してもらう